

平成 27 年度「水環境文化賞」を受賞して

国際ロータリー第 2530 地区 社会奉仕委員会 中村 岳 嗣
(猪苗代ロータリークラブ)

この度は公益社団法人日本水環境学会から私どもの活動にご評価をいただき「水環境文化賞」を受賞することができ感動しております。私は「国際ロータリー第 2530 地区」の社会奉仕委員として地区代表者の酒井善盛氏の代理で受賞式に出席しました。私どもの活動の一端を紹介させていただきます。

1. 猪苗代湖の位置

猪苗代湖は東北地方南端福島県のほぼ中央で、面積 103.3 km²、周囲約 50 km、貯水量 38.6 億 t、淡水湖では琵琶湖に次いで大きい。水面標高 514 m も特長である。西は会津若松市、北は猪苗代町、東は郡山市に面している。1888 年に最後の噴火をした磐梯山と共に磐梯朝日国立公園の一部である。中世より水運、近世には農業用水にも利用され、明治以降は水道、灌漑、水力発電の水源にもなっている。2002 年から 2005 年まで、環境省から水質日本一と評価されていた。2011 年には日本ジオパークに認定された。日本の内水面では貴重な湖水浴のできる砂浜も多数ありレジャーやスポーツの利用も盛んである。磐梯山や四季に恵まれた景勝、多数のスキー場と共に当地は通年の観光ができる。湖は福島県の豊かな自然の象徴で、県民共通の故郷の風景であり宝である。

2. 国際ロータリー第 2530 地区について

国際ロータリー第 2530 地区は福島県内の 66 クラブ 2,400 名のグループで、県内各クラブの目的推進を支援する団体である。ロータリー活動は本来クラブ単位の活動が基本であるが、2002 年より「阿武隈清流協議会」を福島県中通り地方の流域クラブで組織し、阿武隈川の浄化活動の成果をおさめてきた。一方、2006 年頃から猪苗代湖の水質悪化が顕在化し、阿武隈川浄化後の課題は「猪苗代湖の浄化への取り組み」と目されるようになり、2010 年に県内全クラブで 5 年間共通目標に取り組むべく「ロータリー猪苗代湖水環境協議会」が組織され、汚濁の要因となる北部水域の漂着水草回収作業を開始した。

3. 水質の問題点と浄化の方法

猪苗代湖に流入する長瀬川の水は硫酸酸性で鉄やアルミのイオンも多く、リンはフロック等に吸着沈殿され湖底で安定している。一方 2006 年以降大腸菌群数が環境基準値を上回り、環境省の水質評価ランク外になった。主な原因は 15 年以上前から中性化傾向の pH、それに影響された COD の上昇と考えられる。「漂着枯死した水草を回収して COD 値を下げるのが汚濁防止に有効な方法の一つで、さらに大腸菌群数が環境基準値を下回れば他の 4 項目はほぼ良好なため、従来同様日本有数の清澄な湖という評価を得られる。多人数で簡単にできる作業を行えば効果的である。」当協議会は、こうした考えを持った日本大学名誉教授中村玄正氏と共に、北部水域の砂浜に流れ着いた水草の回収作業を 2010 年から毎年 10 月から 11 月中旬の毎週土日に行って来た。協議会は予定の 5 年間の活動を終了し、2015 年から中村玄正氏を理事長と

する NPO「輝く猪苗代湖をつくる県民会議」が発足して漂着水草回収作業は昨年で通算 6 年目になった。国際ロータリー第 2530 地区では協議会を解散しても NPO と共に県内の全クラブに呼びかけ、昨年も多数の会員が作業に参加している。また、阿武隈清流協議会から続く県内の大学の水泳部が参加する水泳大会を猪苗代湖で開催し、清澄な水質と豊かな自然を内外にアピールしている。

4. 作業内容

作業は漂着水草集積の顕著な湖北部の松橋浜・天神浜の砂浜に枯死して打ち上げられた沈水水草の回収である。波打ち際でヒメホタルイカやセキシヨウモ、ヒシ等をメッシュコンテナに入れる。メッシュコンテナを砂浜で軽トラックに積み、さらに 2 t ダンプに積み替えて集積場へ運ぶ。水草は堆肥化することが目標だが現状では容易ではない。6 年間の参加人数は、地区会員 3,600 名を含む 9,845 名。県内外の企業、工場ユニオン、学校、各集落の資源保存会他多様な団体の行事として、また多くの有志個人の参加により成り立っている。6 年間の累計回収量は 994 m³、2014 年には 1.1 mg L⁻¹ あった COD 値は 0.1 mg 減った。この作業による COD 値上昇抑制の効果が出ていると考えている。年間の回収が減らず COD は現状の水 1 億 t の COD 値 -0.1 mg L⁻¹ に相当する模様である。



写真 1 猪苗代湖での漂着水草の回収作業

5. 今後の課題

一般の参加者も各クラブの会員も毎回楽しく作業に参加して下さりととても有難い。しかし平成 27 年度の速報値にも一度だけ大腸菌群数の基準値超過があった。水質日本一を再現するにはさらに努力が必要である。この作業以外にもヒシの増殖抑制、数十年間行われていないヨシの適切な刈取り等の方法があり、県民全体の課題とすべきと思う。周辺の小中学生への環境教育も重要である。NPO と共に今後もより多くの人と各クラブに呼びかけ、水質日本一の復活を目指して作業を続けていきたい。

栄えある受賞にあたり、日本大学名誉教授 中村玄正先生、公益社団法人日本水環境学会東北支部幹事長 中野和典先生、県内 66 クラブ 2,400 名の会員、6 年間の参加者 9,845 名の皆様、猪苗代ロータリークラブ、私の家族、多くの関係者の皆様に心から感謝いたします。